

光の子



No.63 1995. 12. 25.

● 賜物を生かして互いに仕えなさい (ペテロの第1の手紙第4章10節)



メリー クリスマス!!
社会福祉法人 光の子どもの家

え・中島英子

クリスマス

サンタクロースのおじさんが
クリスマスにやってくる

イエスさまのお生まれの
すてきなページェントを
この家に 今年も

でもふしぎだな
ほかの時はサンタクロース
どこにいるの

やっぱりおかしいな
サンタクロースはどうして
おとなにプレゼントあげないの

ことしこそ
こどもも おとなも

みんなよろこぶ
クリスマスであるように

世界じゅう
みんなよろこぶ
クリスマスを!

亜季

神を賛美せよ

ルカによる福音書第17章18節

この外国人のほかに神を賛美するために戻って来た者はいないのか。

理事長 福島 勲

クリスマスを迎える。あのモミの木や飾りなど、真に神を讃えるものなのか。すべての行事がキリストの救いへの感謝、神への讚美につらなっているのか。異教の人々の祭とどう違うのか。あらためて反省させられる。

イエスはエルサレムに向かって行く間を通られた。途中、らい病を患っている十人の者らが出迎え、遠くの方から憐れみの癒しを乞うた。

イエスはこの十人をいやされたがただ一人だけ、しかも外国人だけが戻って来て、お礼を申しあげた。

救いを求めることのないイエスであるが、あとの九人はどうしたのかと咎められる。

人は生まれたときからいろいろの人に世話になっている。両親からは「してもらおう」という生まれながらの生活が、いつまでたっても変わらず「してもらい」、してもらうことが特別の恩義とも感じない。

友人、先生、上司さては行きずりの知らない人からも恩義を蒙っている。そして思い出すと、それらに対して一言のお礼も言わず、また一枚のはがきの札状も怠って、忘恩を重ねていることが多い。

今の若い者は礼儀を知らない、と年寄りや上司がなじるが、なじる彼らとて若いときには、年配者らから同様なことを言われてきた。

牧師であったわたしは、信徒の方々の厚意にどれだけ報いることができただかと思うと、心苦しくも汗顔の至りである。

信施無斬（しんぜむざん）の罪という仏教用語があるが、お施を受けながらこれに償う功德を行わない罪である。

スとはもともと神への礼拝を意味する言葉である。礼拝が報いを要求すれば、それは取引である。

奉仕に礼を言う、礼を言わないと批判するのは第三者であって、奉仕の当事者の言うことではない。

もう昔のことになるが、戦後間もなく福井の地震（一九四三年）や、狩野川台風、伊勢湾台風（一九五九年）など矢継ぎ早に大きな災害があった。

あの頃キリスト教会の青年たちが全国から馳せ参じて、奉仕活動をした。ある宗教団体では〇〇教と大書きした幟を立てたりしていたが、キリスト者青年男女は、ただ黙々と奉仕に汗を流していた。

イエスがいやされた九人に求められたのは、神を讚美するために戻って来る、ということであった。

クリスマスが、人類への神の最大の賜物であつてみれば、人はいかように神を讚美しても、こと足りるものではない。

阪神大震災で多くの善意のボランティアが、被災者の痛みを少しでも和らげ、共感しようとして活動に赴いた。この人たちの感想をNHKが収録して放送していたのを聞いた。

その中に、奉仕したが、一言もお礼の言わない人がいたと不平を漏らしている者がいた。

われわれの施設も、多くの方々の善意に支えられていることを心より感謝し、外形だけのお礼ではなく、職員も子どもたちも関係者一同、強いられてでもなく、心よりこのような恵を与えて下さった神に感謝し、神を讚美するものでありたい。

エッセイ

人恋し

「人恋し火とほしころをさくらちる」

この句に出会った時、私はギクッとした。信州上田城趾にある句碑の前に立った時である。しかしながら残念なことに、石に刻まれた流れるようなこの筆文字が、私には読めなかったのである。

俳句結社「浮野」の人たちの吟行会に、ただ一人の俳句を作らない人として参加していた私は、主宰の落合水尾先生に読んでもらったわけである。

最初の「人恋し」という言葉が、非常に心に突き刺さった。

私の知っている俳句といえは、昔、教科書で習った俳句ぐらゐなもの、
「古池やかはす飛びこむ水の音」だとか「春の海ひねもすのたりのたりかな」などというものばかりだった。

ところが、「人恋し」と、いきなり言い出す句というものが、きわめて型破りに思えたのであった。

「江戸時代の俳人で、上田市ゆかりの人なんですよ」と先生が言われた。江戸時代の人というのも、一つの驚きであった。現代の人ならば

「人恋し」くらい朝飯前に言っているのだらうが、江戸時代の俳人が「人恋し」と来ると、一体この句の作者はどんな人なんだらうと思ってしまうのである。作者は加舎白雄だそうである。もちろん私の知らなかった名前である。

そこで、「人恋し」の句を、私は覚えてしまった。手帳にメモしたわけではない。覚えておこうと努力したわけでもない。夕方の灯ともしころに、桜の花の散る様子を、一人の俳人が佇んでながめている。そして、その無表情な顔の心の裏に「人恋し」強い思いがあふれてくる。桜の花も美しい。加舎白雄。「人恋し」この句は、こうして私の心の中の名句として刻み込まれたのである。四年くらい前のことだったらうか。

今年の九月、旅行先で信州の上田の人という四人グループと、昼食の時隣り合わせた。上田市とくれば私のとっては例の「人恋し」の句である。私は思わず例の句を語んじてみせた。すると、その中の一人が言った「加舎白雄だったら、私の知人が

研究書を出しています。あとで御紹介しましょう。」

私は俳句を作る人でもないし、まして研究している者でもない。けれども、加舎白雄だったらもう少し知ってみたい気にもなった。そこで、「ぜひ紹介して下さい」と頼んでいたのだ。

旅行から帰って一週間程すると、信州の人から一通の手紙が来た。

俳人白雄 人と作品 矢羽勝幸著 信濃毎日新聞社発行とあった。値段は六八〇〇円。早速注文してみると、まもなくずしりと重い本が届いた。ほんのちよっぴり知りたい私にとつては立派すぎる研究書である。

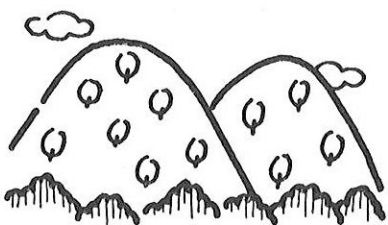
そこで、「人恋し」の句について読んでみて驚いた。私が解釈していたのとは全く違う意味なのである。

吉野山のあわれさは、単に花の王桜の名所であるばかりでなく、上古以来たびたび歴史に登場し、しかも悲劇的な人物と関係することが多かったことによる。と書かれている。白雄は、吉野山に関わる歴史的事実を充分承知して吉野を遊覧し、その上で「人恋し」が生まれた、と

県立高校美術教諭 中島 睦雄

いうことであった。私が最初にとめた「人恋し」は、白雄の恋する人だとか、なつかしい知人であるとかでは全くなく、歴史上の人物、つまり大海人皇子、源義経、静御前、後醍醐帝、楠正行きなど、そしてまた白雄の敬慕してやまなかつた西行であり芭蕉であった。

私は全く誤解していたことになる。言葉の表面のみをみた、自分自身の貧しい体験と知識だけでこの名句を心に抱いていただけだったのである。私は少々ガッカリした。浅はかな自分がやりきれない。しかし、このずっしりした一冊の本を前にして、もう少し加舎白雄という人について知りたくなつてもいたのは事実である。



学者という商売も因果な商売である。学者の日常は、全く性質の異なる二つの生業に分けられる。

研究と教育である。

昔は、優れた学者は教育が苦手で、あると言われ、事実、偉い教授の講義は分らないのが、大方のならないであった。

講義の準に時間をかけている者などに、良い仕事ができるはずがないと、昔のいわゆる偉い学者は考えていたふしがある。

山形大学医学部教授

仙道 富士郎

学者もどきのつぐやき ⑬ 雅(みやび)の心

あるということは、良く理解できる。しかし、一人の学者が研究にも、教育にも、きわめて優れた力を発揮するということは、昔の偉い学者をまねるわけではないが、なかなか難しいことのように思う。というの

は、研究と教育は、その方向性が全く逆な精神活動を要求するからである。

つまり、教育には、すでに明らかになっている事柄をいかによく整理できるかという総合力、形で示せば丸い円を描く力、人間としては、円満な人格が要求される。

しかし、研究では、丸い円のように自己完結している状態は、むしろ新しいことを見つけようとするパトスにとっては阻害要因となる。円では、手も足も出ない。

以前、二人の大変優れた研究者から、別々に同じ話を聞かされたことがある。

学者が研究した結果は、学会誌に発表され、初めて成果として認められることになる。最近どのような結果が得られているかを知るためには、最新の学会誌に目を通さなければならぬ。

二人は「いい研究をしたいのなら、そのようなことは、やめなさい。」と教えてくれた。どうしても人の真似をした研究になってしまい、独創性の高い仕事は生まれにくいのである。

学者もどきを名乗る私にとってはなかなかきつい忠告ではあるが、なるべく人の真似は、避けるように

してはいる。

しかし、過去の自分たちの成績だけを基盤にして独創性のある仕事を世に問うていくことは、難しい。しかも、困ったことに、といつても、それは私にとって困ったことである

だけで、人の世の動きとしては、当然の理であるのだが、新発見は、同時に複数の研究室で見つかることが多い。同じことを研究しているも発表が遅れると、それはゼロとみなされる。

ご想像いただけるように、私は、教室の大学院学生の尻を追いかけながら、「データはまだか、データはまだか」とうるさくつきまとうオジサンになってしまった。

今評判になっている辻邦生著「西行花伝」を読んだ。

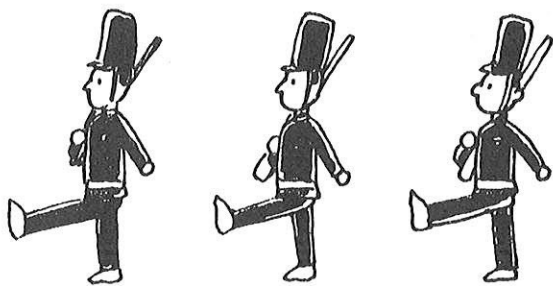
若き日の西行を先輩が論じている言葉が胸に突きささった。「・・・目的を達したとき、人は満足し自分とそして自分の周囲を見回す余裕ができる。・・・余裕があったとき、初めてこの世を楽しもうという気分になる。この楽しもうという心が雅(みやび)なのだ。・・・」そして、目的を達成してもまた次の目的を考えてしまふ人間には雅の心が解らないことを教えていた。

ふと、前記の私を論じた先輩の一

人が、「香りの高い研究」といつていたことを思い出した。雅の心に通じる研究と言ひ換えることもできようか。

それにしても、がつがつと音をたてながら、ここまで走ってきて、本当に何をめざして何をしてきたのだろうか、と思う。

この職を終えるまでもうそんなに長い時間は残されていないのだが、少しでも考え直してみなければなるまいと思うことしきりである。



トムソーヤたちの朝 ⑧

教会大宮東大団キリスト教日本

永野三恵

たちと出会うが、家族に愛されていないと感じている子供が増えているのではないかと思わされる。

教会で出会ったN君は全身でSO Sを発していた。言葉もなく無表情な彼は、孤独な殻の中に閉じこもって身を守っているようだった。

それでも中学一年生から、教会学校に途切れることなく通っていた。勿論その陰には、彼の置かれていた状況や気にかけて見守っていた中学校教師の暖かい目があった。

初めに心を閉ざしていた彼が関わりの中から色々なことを話してくるようになった。小学二年の時母親が亡くなり、父親の元に三人の男の子が残された。彼は末っ子だった。

小学時代は父の期待に添った息子として父の誇りでもあったようだ。それが、都内の有名私立中学校へ入学後、学校へ通えなくなり、家でぶらぶら過ごすようになった。そこから、父と息子の苦悩の日が始まった。

父は子に殊更厳しく当たるようになり、子の心の中の寂しさや悲しさに思いを馳せることができなくなった。唯、家でぶらぶらしている彼を次第に「無駄に飯を食っている」「金ばかり入り用な邪魔者」とさえ思うようになっていった。激しい叱責や暴力から、彼はひたすら逃れようと家

ほんの僅かでもよい、人の気持ちの暖かさを知って欲しいと願った。

父も幼い時から家庭的な重荷を負っていた。両親から捨てられ、自分の意志でここまで生活を築いてきた。

「それにくらべれば子どもに何の不足があるのだろうか」「妻が死んだ時俺の人生は終わった」と思ったと言った言葉が耳に残っている。

母の不在がこんなにも大きな家庭の崩壊をもたらした、子どもの魂を変えてしまうのかと、驚かされた。

彼は、残り少ない中学時代の最中、やっと自分の意志で決断した。「光の子どもの家」の子どもとして生活させてもらうことに自分を賭けた。

父との和解には相当の時が必要だろうが、自ら下した決断によって、自分を受け入れてくれた光の子どもの家の職員の方々の支えと愛と、子どもたちとの生活の連帯感によって人への信頼を確実に取り戻している。愛されている安心感を一杯に表しながら、冷たい北風をものともせず学校へ通い始めた。

クリスマス 神がイエスを通して示された大きな愛に包まれていることを感謝しつつ、この時代が失ったその愛をもう一度復活させるために、与えられている愛を少しでも分かち合っていきたいと願っている。



おめでとう

☆ ☆ ☆
クリスマスについて

小四 福子

クリスマスが来るのが待ちどおしくてなりません。もうすぐイエスさまのお生まれになった日がやってくるんだなあと思います。いつかは雪のふるクリスマスがありました。そのことがいまでも忘れられません。馬ごやのお生まれのイエスさま、かわいそう・ヨセフさんがマリヤさんとイエスさまを守ります。神さま、今年で原田家から出ていく晃子さんのためにも、楽しいクリスマスにして下さい。そして、みんなを守って下さい。

☆ ☆ ☆
クリスマス

中二 亜季羅

クリスマスってさ 何のことはない イエスさまが生まれた日だったんだってさ。驚いたねえ ほくは なんだか

うまいものが食べられて いいものが貰えて えらい調子のよい日だと思ってた。

なんか 元手なしでさ そんなことあるはずがないよ ねえ

きつと誰かがものすごい損をしているんだと思うな おれ 見たこともない誰かのために すごい損なんかなできるだろうかな そんなことできそうにないから 今年はこちらと手伝いをして みんなといっしょにクリスマスにしたいものだなあ それに来年は受験だよ しっかり勉強してちゃんと高校に入って誰も心配しないようにがんばらなくっちゃあ

☆ ☆ ☆
サンタさんへ

小五 一志

クリスマスはイエスさまの生まれた日ですよ。しかし、イエスさまのことを知らない人がいっぱいいるよ。クリスマスといえば、サンタさんがプレゼントを下さる日だなどとい

いますが、ほんとは神さまが、ぼくたちのためにプレゼントを下さった日だということです。

だから、ぼくたちは神さまに、イエスさまをプレゼントして下さい。ありがとうございますなどと、かんしゃをこめる日だと思います。

と ころ で 今年は何をくださいますか？
サンタさん・

☆ ☆ ☆
クリスマス

中一 萌季

ここに来てからクリスマスは今年で十一回目になります。毎年ずっと『ページェントとごちそうを食べる』この毎年繰り返してきていることが、私にとって『ちょっとうれしい』ことでもあり、『つまらない』ことでもあります。

『つまらない』というのは、ずっと、ワンパターンなことしかやらないということ、『うれしい』ということは、昔からやってきたことがどんどんなくなってしまうこの世の中で、変わらずに守られている、とい

うことです。

『うれしい』と『つまらない』とは、どっちの気持ちが強いか良く解りませんが、多分『うれしい』という気持ちの方が多くに思います。

今年のクリスマスは、『うれしい』『楽しい』ものにして、そして、今まであまり思わなかったことだが、『イエスさまが生まれてきて本当に良かったなあ』という気持ちが持てるようにしたいと思います。

☆ ☆ ☆
クリスマスの日

小六 多歌音

私がこの季節に一番楽しみにしているのは、クリスマスです。それはイエスさまが生まれた日だからです。十二月二十五日には、馬小屋でお生まれになったイエスさまをみんな、心を合わせてお祝いしたいと思います。

イエスさま、馬小屋の中でお生まれになったイエスさま、どうか私が悲しかったとき、くやしかったとき、助けてください。これまでのように。そして、遠いところに住んでいるお母さんと弟を守って下さい。

☆ ☆ ☆
クリスマス

中三 加津子

私の今の本当の思いは、光の子どもの家に来ることができてよかったと思っと思っています。ここで、いろいろな人に出会い、別れ、そして今があります。たとえそれが悲しい出会いでも、嬉しい出会いでも、どんな別れでも、それが現実なんだと思います。クリスマスが来ると、もうすぐ卒業してお別れの友だちがいます。去年はお兄さんとの最後のクリスマスでしたが、いろいろあってさみしいクリスマスでした。今年はどういう過ごそうかというろいろな思案をしています。もしかして、受験生なのだから勉強のクリスマスかな、とも思います。でも、受験生だってクリスマスぐらいは楽しみたいと思うのですが、アマイのかなあ、と思います。それに、三十人全部が集まることってそんなに多くはありません。

☆ ☆ ☆
クリスマス

中二 亜季羅

クリスマスってさ 何のことはない イエスさまが生まれた日だったんだってさ。驚いたねえ ほくは なんだか

うまいものが食べられて いいものが貰えて えらい調子のよい日だと思ってた。

なんか 元手なしでさ そんなことあるはずがないよ ねえ

きつと誰かがものすごい損をしているんだと思うな おれ 見たこともない誰かのために すごい損なんかなできるだろうかな そんなことできそうにないから 今年はこちらと手伝いをして みんなといっしょにクリスマスにしたいものだなあ それに来年は受験だよ しっかり勉強してちゃんと高校に入って誰も心配しないようにがんばらなくっちゃあ

☆ ☆ ☆
サンタさんへ

小五 一志

クリスマスはイエスさまの生まれた日ですよ。しかし、イエスさまのことを知らない人がいっぱいいるよ。クリスマスといえば、サンタさんがプレゼントを下さる日だなどとい

いますが、ほんとは神さまが、ぼくたちのためにプレゼントを下さった日だということです。

だから、ぼくたちは神さまに、イエスさまをプレゼントして下さい。ありがとうございますなどと、かんしゃをこめる日だと思います。

と ころ で 今年は何をくださいますか？
サンタさん・

☆ ☆ ☆
クリスマス

中一 萌季

ここに来てからクリスマスは今年で十一回目になります。毎年ずっと『ページェントとごちそうを食べる』この毎年繰り返してきていることが、私にとって『ちょっとうれしい』ことでもあり、『つまらない』ことでもあります。

『つまらない』というのは、ずっと、ワンパターンなことしかやらないということ、『うれしい』ということは、昔からやってきたことがどんどんなくなってしまうこの世の中で、変わらずに守られている、とい

うことです。

『うれしい』と『つまらない』とは、どっちの気持ちが強いか良く解りませんが、多分『うれしい』という気持ちの方が多くに思います。

今年のクリスマスは、『うれしい』『楽しい』ものにして、そして、今まであまり思わなかったことだが、『イエスさまが生まれてきて本当に良かったなあ』という気持ちが持てるようにしたいと思います。

☆ ☆ ☆
クリスマスの日

小六 多歌音

私がこの季節に一番楽しみにしているのは、クリスマスです。それはイエスさまが生まれた日だからです。十二月二十五日には、馬小屋でお生まれになったイエスさまをみんな、心を合わせてお祝いしたいと思います。

イエスさま、馬小屋の中でお生まれになったイエスさま、どうか私が悲しかったとき、くやしかったとき、助けてください。これまでのように。そして、遠いところに住んでいるお母さんと弟を守って下さい。

クリスマス



☆ ☆ ☆
クリスマス

中三 加津子

私の今の本当の思いは、光の子どもの家に来ることができてよかったと思っと思っています。ここで、いろいろな人に出会い、別れ、そして今があります。たとえそれが悲しい出会いでも、嬉しい出会いでも、どんな別れでも、それが現実なんだと思います。クリスマスが来ると、もうすぐ卒業してお別れの友だちがいます。去年はお兄さんとの最後のクリスマスでしたが、いろいろあってさみしいクリスマスでした。今年はどういう過ごそうかというろいろな思案をしています。もしかして、受験生なのだから勉強のクリスマスかな、とも思います。でも、受験生だってクリスマスぐらいは楽しみたいと思うのですが、アマイのかなあ、と思います。それに、三十人全部が集まることってそんなに多くはありません。

☆ ☆ ☆
クリスマス

中三 鷹貴

まだ小さかった時、この家で初めてページェントをしたときのこと。ほんやりとですが忘れられません。小学生の頃は、聖歌隊をしました。声のきれいな歌のうまい人が選ばれたので、とても嬉しく得意な気持ちだったこともしっかり覚えています。ページェントは、イエスさまの生まれた様子を聖書朗読と、歌と、振り付けで表現するのです。この家の大人も子どもも、みんなやっていて、この家にしかないものです。小さい時は平気だったけど、中三です。今年も心をこめたページェントで、集まってくれるみんなに感動して欲しいと思います。

☆ ☆ ☆
クリスマス

中三 鷹貴

まだ小さかった時、この家で初めてページェントをしたときのこと。ほんやりとですが忘れられません。小学生の頃は、聖歌隊をしました。声のきれいな歌のうまい人が選ばれたので、とても嬉しく得意な気持ちだったこともしっかり覚えています。ページェントは、イエスさまの生まれた様子を聖書朗読と、歌と、振り付けで表現するのです。この家の大人も子どもも、みんなやっていて、この家にしかないものです。小さい時は平気だったけど、中三です。今年も心をこめたページェントで、集まってくれるみんなに感動して欲しいと思います。



クリスマス

原田家日記 ー食事ー

十月十五日 連日学校と部活で忙しい中高生。日曜ぐらい、休みの日ぐらいゆつくりさせたい、と思う気持ちには、子どもたちの「自立」に役立つ様子はなく、裏目に出ていることに、ふと気づく。「もしかしたら、マンガを読む時間、ごろごろする時間、騒ぐ時間だけを殖やしているのでは」と思う。私は、一体何のためにここにいるのだろうか。

わき起こった疑問からストライキを起す。食事の時間になっても何も用意していないことに、ただならぬ気配を察知して、ひとり、またひとり神妙な顔で手伝いに加わる。

十月二十一日 学校で「ハンペンのチーズ焼き」を習ってきた六年生の多歌声。今日の夕食のメニューとして十二人分作ってくれる。包丁で切れ目を入れるのに真剣な表情。チーズはみ出してしまい、ハンペンは破れる。「ふーん、オレの小学生の時より、うまいじゃん。」と、中二

の潔が後ろからのぞきこむ。おまわりのリクエストに笑顔で応える。

十一月十五日 「何かやることない？手伝おうか？」と必要以上の大声で受験生の加津子。「その分勉強してよ」と声にならない分、溜息が出る。「どうしたの？」と加津子。冗談で「疲れたよ」というと、「あとは私がやるか？」「いいよ、もう終わるから」「あのさ、お茶は私が煎れるから」連日連夜お茶を煎れられる。

十一月二十日 中高生の弁当を作ることに慣れたものだが、数年ぶりの幼児の仲間入りで幼稚園用の弁当つくり。ままごのようだ。

十一月二十六日 福子の誕生日。この日だけは、「何が食べたい」とメニューを独占する誕生日会。そう聞かれて「納豆」だったのは一昨年まで。今は「お寿司」であり誕生日会にふさわしい豪華メニュー。福子にピッタリの、ほかほかのさつまいもから作ったスイートポテトのケーキと共に十才を祝う。 竹花 信恵

光の中で

佐藤家

デパートがクリスマスの飾り付けを始める、幼い日の意味もわからなかったクリスマスが、とても楽しみでわくわくしたことを思い出す。子どもたちが大人になったとき、美しいたくさんの思い出を心によみがえらせて微笑むことができるようにと、祈る思いで準備を始めるこの頃である。

十一月の最初の頃、中二の紅子が「今年のクリスマスプレゼント、バスケツトシューズがいいな」と私に言いに来た。これまであまりこれがほしいなどといってこなかった紅子なのでちょっとうれしかった。

「サンタクロースに手紙を書くって届くかもね」と言うと、近くにいた小五の珠弥が「違うよ、夜中にサンタクロースの奥さんが作るんだよね」とニコニコしてこちらをみる。「でも奥さんがわからなかったら困るから・・・」奥さんは知ってるんだよ。近くにいるから、でも光の子どもの家のサンタクロースうるさいよ。メリークリスマスって起きるまで言うんだよ。」周りにいた子どもたちも、口々にそうなんだよ、いい子になれよとか・・。

そのうちページェントの配役やらなにやら話がつきない。毎年同じように来るクリスマス。でも毎年心を込めて迎えたいと思う。

今年はずかに祈りながら迎えたい。人のために祈る心を子どもに伝えられるように。子どもたちと祈りを共にする生活を創ることができましように。 坂巻 照子



子どもたちの季節

仙道家

幼稚園からここで暮らしていた山城敬が、半年ほど前から生活と生活などとの統合が崩れ、精神医の診断を仰ぐなどの不調を訴えていた。叔母夫妻などの協力を得て養母でもある祖母のもとに帰るための帰宅訓練を経て、九月から新しい生活を始めた。中三の時期の転校、高齢な祖母との生活など心に掛かることだったが、時折の祖母の報告などで、精神的な休養を経て新しい生活環境での元気な姿を伺うことができていた。

十一月はじめに暮らしを同じくしてきた同学年の鷹貴の誕生日にお祝いに来てくれて、その回復ぶりを覚えてくれた。トラブルの絶えなかったこの半年余りの出来事が、「家に

河のほとり 旗井の家

その日の夕食はカレーライスとツナサラダであった。なんとということのないメニューだが、実は担当者にとっては忘れられない夕食になったのである。

「倉ちゃんは何が食べたい？サンドイッチ？お寿司？ゼリー？」と亜季。私の誕生日をするために子どもたちで何か作ってくれるというのである。「何でもいいよ。亜季たちの作れるものでいいんだよ」というと、後先を考えない亜季は「じゃあサンドイッチとポテトフライとゼリーにしようかな。」するとすかさず千沙が「亜季ちゃん作れるの？私たちのできるものにしなないと駄目だよ。」と鋭い指摘。で、結局二人で相談の上カレーライスとツナサラダに決まったようである。

この日の午後は、買い物から食事作りで二人は大忙し。黙って見ていることの苦手な私は二人の様子が気になるって仕方なかったが、今日ばかりは

「帰りたい！」という私たちに示した彼の必死のサインであったことを確認させられ、この仕事の複雑さと重さを感じ知らされている。

十月十一日 一志十一才の誕生日。ダイニングに一杯のお友達や大人たちが集まって、一志が生まれ、出会ったことを感謝しこれからもよい仲間になれるよう思いを新たに。 たくさんのプレゼントに囲まれ、「はくの誕生日のお祝いをしてくれてありがとうございます。」しっかりと。 まっすぐな成長を。

十一月二日 信一九才の誕生日。

お祖父さん、お母さん、妹が駆けつけて、招待したお友達もたくさん。ニコニコがとてもいい顔の信一である。信一特有のしぐさと良く解らないがとほけた感じの言葉づかいで、それぞれのメッセージとプレゼントに、「はい、ありがとう！」など絶妙な受け答えで皆を和ませてくれた。

お祖父さんが、「こんなにたくさんプレゼントや心遣いを・・ほんとに、ほんとに・・」と、後は声にならない謝辞を述べられ、その晩は信一を抱いて一夜を共にしてくれた。

夜遅く帰ってゆく母と妹の車の尾灯を追いかけて「さよなら！また来てね！」と叫びながら走り続ける信一の腕に母からプレゼントのサッカー

りはノータッチ。台所は二人が呼びに来てくれるまで一歩も近づかなかった。

六時にはすっかり準備も整い、亜季がニコニコしながら「倉ちゃんできたよ。」と呼びに来てくれた。

男の子三人は、食事の準備には携わらなかったようだが、担当者のためにプレゼントを用意してくれていた。プレゼントを買いに行ってくれたのは高三の文明。自転車で小一時間かかるお店まで行ってくれたという。彼が選んでくれたのはコーヒーマーカー。私がコーヒー好きで毎日欠かさないことを知っていてくれたようである。

この地で子どもたちと迎える十一回目の誕生日。どんなに大きなダイヤモンドをもらうよりも心のこもった、貴重なプレゼントを五人の子どもたちにもらえたことが嬉しかった。菅原先生や他の職員の口添えがあったようだが、子どもたちがここまで準備をしてくれたことに大きな成長を感じた。来年も再来年も、その次もこの子どもたちと誕生日を迎えたい・・そう思った。 倉沢 智子

ボールがしっかりと・・。

十一月二十二日 悠子が三年生の時から通っているスイミング教室の日。いつものように帰りのバスを近くの商店の前で迎えて帰った。

翌朝お休みから戻った担当の由紀子さんに何やら小さな声で嬉しそうに話している。突然由紀子さんが、「え、合格したの！よかったねえ、がんばったものねえ。」と大きな声で嬉しそうな声をあげた。

級も一桁になると進級は難しい。周りにいた皆が「おめでとー！」「よかったね！」と口々に。

昨日が進級テストの日だったことさえ知らずに、帰ったときに何も言えなかった自分が少し情けなかった。

十一月二十三日 職員の高性の訓練を目的にして主宰の黛執氏にご指導いただいている俳句雑誌「春野」がとどく。私でさえ七句を出して三句が載るのはしんどい中に、信一と溪子の三句も載る。

その中の一句をご紹介します。 赤とんぼ飛んでゆきたいお母さん

小三 信一

祖母からの栗飯美味し母いずこ

中一 溪子

幸せなひとときをご紹介しますが、こんな時間をいっぱいに行きたいよう励みます。 白石 輝雄

現場から

のびやかにふくよかに

Ⅳ

笹山 恵理

光の子どもの家から一歩外へ出て、家族と共にいる子どもを見ると、私の心は切なく痛む。どの子もなんて安心に満ちた表情をしているのだから。そして落ち着いていることか。

彼らは、絶対的な愛を当然のように得、そこにいる。安心して自分の世界を広げ、深めることができている。時には豊かな愛が細っているのか、家族といることが苦しそうな表情の子も見ることがあるけれども。

人なら誰でも求めてやまない『愛』それも、昨日や今日出来上がり、明日にはなくなってしまうような安っぽい愛でなく、いつも変わらぬ自分に与えられ、何をしようとも失うことのない本物の愛。

子どもがその子らしく健やかに毎日を送り未来へ向かっていくために最も必要なものが、それなのだろうと、最近暇さえあれば考える。そして子どもは口には出さなくても、その愛を誰よりも母から受けることを望んでいることも。それぞれの事情から母と家族と一緒に暮らすことのできない子どもたちにとって、それに代替の存在として

施設保育がある。

安心できる生活を作り出し、その子らしいよりよい成長と発達を援助することが仕事であり、そのためには『愛』が必要になる。けれど、仕事とはいえ、愛することの難しさを毎日のように感じさせられている。

愛することができなく、受け入れられない子どもたちに日々申しわけなく思う。

二才の洋は今、不安で不安で仕方のない日々を送っている。私がすぐ近くにいても、自分より少し離れようとすると「行かないで」と泣く。

先日、私が階段を上っていくと、激しく泣き出し「アーン」と叫び声をあげ不安を体中で表現した。「行かないで」と何度か何度も叫ぶ。

置いて行かれないだろうか、という不安は極限だった。「洋は置いて行かれたりしないよ。いつも側にいるし、洋を置いていたりしない。大丈夫だよ。」私の言葉に、涙をこらえながら必死で「うん、うん」とうなずく。抱っこされるとにっこり微笑み、一人で庭に駆け出していった。

二才の美季は、心の安定の場を得

られず、くずおれそうな自分を泣いて私に訴えた。入所の日から美季には安心できる場がなかった。抱っこしてくれるはずの人の手はいつも誰かで埋まっている。何でこの人は自分を抱っこしてくれないのだろうかという不信任は生活の節々で表れる。

「着替えよう」「イヤ」。担当の私の指示をことごとく拒否する。それは彼女の「受け入れてくれ」というサインだった。

ある日、おしっこで濡れたパンツを替えようとする私の手を体全体で拒否し、激しく泣き続けた。「イヤ、イヤ」と。美季の待つ心の極限であり、崩れかかる心を寸前でくい止めるためのたつたひとつの防衛手段だった。

彼女の好きな自転車に乗り公園へ行くことを提案すると、やっと泣き止み、にっこり笑った。

公園で彼女は入所以来初めて『ぞんぶん』に受け入れられ、心ゆくまで私を独り占めし興味のおもむくまま遊び続けた。

二才の貴樹は不満だった。その夜も、いつものように、ただ眠ることだけを求める関わりをしてくる私のいうことを無視し、布団の上でふざけ続けた。そのうちに寝た振りをして関わり

を切る私にいつもは体をピタリとつけて寝入ってしまうのだったが、その夜は手で「ちょきん、ちょきん」と言いながら私の首を触っている。「その手はなあに？」と聞くと、「包丁」「首切ってるの？」「うん」「じゃあ死んじゃおう」と、言うど、えへつとわらい、死んだふりの私の名を呼び「もう大丈夫なのよ！」。そのまま布団の上で私と遊ぶと満たされて眠りについた。

首を切るまねをしているときの貴樹の目は怒りの目だった。彼の心もまた、受け入れられない思いから健全に立っていることができなくなっていたのだった、と思う。

子どもたちはそれぞれに、受け入れ不足の不安や怒りを表現する。それは、自分自身の危険を教えるサインでもある。けれども彼らは、大人による受け入れの不足をいつも許してくれる。許してくれるが、では、絶対的な愛が得られていなかったとしたら、彼らはよりよく成長し、発達していけるのだろうか。

神さま、クリスマスに誰にも贈りものを下さるのなら、子どもたち一人一人に必要なだけの『愛』を下さい。

養護メモ 59

家族 その十三 『情緒12』

北海道の西海岸、奥尻島をはるかに望む熊石町を半年ぶりに尋ねた。

九年前、小学一年を頭に二才までの四人の山下兄妹弟が入所しそれぞれヒトから人間への進化の過程を見るような暮らしを始めた。子どもへの思いが溢れているような母だったが、三人の子連れのハンパな男と再婚した。何回も訪問しての調整や、来訪を促しての関係づくりを力を入れた。そのうち、養子として入籍しどういいうわけか引き取りを急いだ。

それまでの関わりの中で、その男の暴力的な言動や、連れ子同士の中にある関わりや、暮らし方の様式などの齟齬が多く、それらの家族として体を成すための大きな問題を克服する努力を促していた。

そんなとき突然に「家庭引取り」と児童相談所の若い担当者から連絡が入り驚かされた。

猛烈な反対運動の後遺症と、強烈な意に反する行政指導を受けていた私たちは、児童相談所との間にもう一つ、一気には切れそうな緊張を抱えてしまった。激しいやりとりも含めて、やっとつくった四人の兄弟

の落ち着いた生活を、一カ月ほど延期するのが精一杯だった。

この国に特徴的な親権というバカでかい権利にひれ伏した児童相談所の「判断」で子どもたちはその男の家で連れて行かれた。

そして三カ月。助けて！という悲鳴と共に裸足の子どもたちを連れて母が夜中にかけて込んだ。再婚の夫の暴力が自分だけではなく子どもたちにも及び耐えきれなくて逃げてきたという。その時「職権でも光の子どもから引き上げて家庭引取りさせる。その責めは私が負う。」と言いつつ当時の指導課長を思いその人の家にその親子を連れていこうとさえ思った。

夕食を食べさせてお風呂に入れ、ぐっすり休ませて母の実家の熊石に同道し、祖母と叔父たちに謝罪して一緒に暮らすことになったのだった。

複雑な母の三人の兄たちの思いや感情などを整理して、やっと母のふるさで生活を始めた四人の子どもたちの平和な生活はそんなに長くは続かなかった。

「先生、お母さんを捜して！」と

いう雅展の電話で、退屈な田舎の生活に飽き足りない母の出奔を知らされた。

熊石まで何回か赴き、生活保護の申請やそれまで関わってきた日高に住む実父と連絡し、祖母と子どもたちの暮らしを成り立たせ、教育環境などの調整に走り回った。もちろん光の子どもの家の職員たちの積極的な経済的精神的な支援も含めて。

春と秋の定期的な訪問や、長男の窃盗事件への対応、養育に関わる電話相談などを繰り返して八年の歳月が流れていた。

二男の日出志はジンギスカンを焼いてもてなしてくれた。

中三の日出志に、「どうだ、受験の準備は進んでいるか？」と尋ねた。

「うん、オレ、就職する」意外な言葉に驚いて、「春来たときと約束が違うじゃないか」と気色ばんだ。

「お金がないし、来年桂が中三で、女だから高校に進んだ方がいいからオレ働くん」と、意志に満ちた顔を上げた。

「お父さんが、お前のことは援助しないと云ったのか？」つい三週間

ほど前、訪問を伝えた時、日高自慢の茸の進呈を言っていた父を思った。

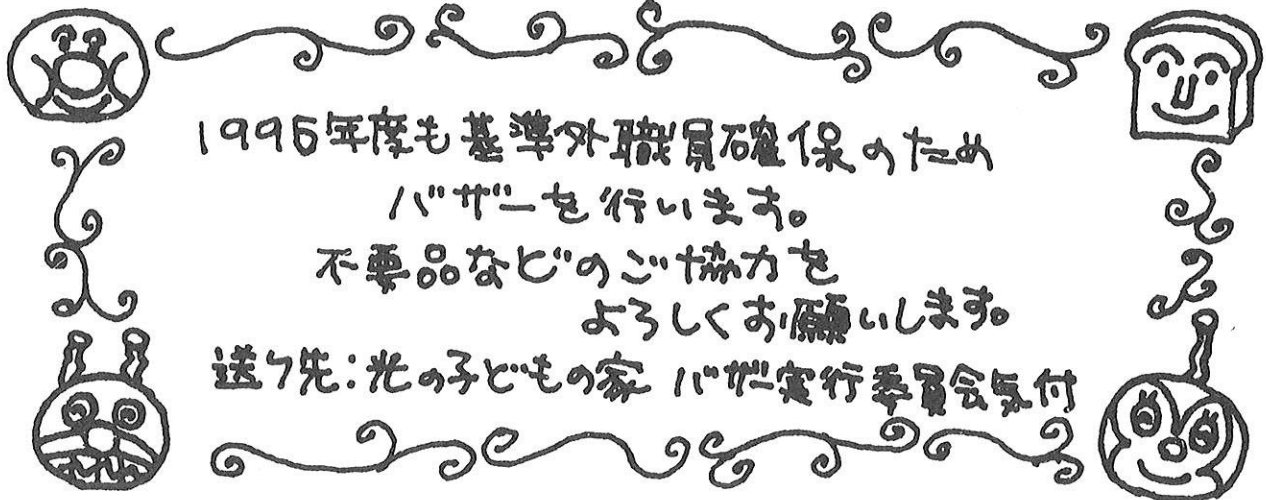
と、日出志の頬をきれいな涙が走った。ややあって、「お父さんは死んだ。三日前にお葬式から帰ってきた」と、うつむいてむせんだ。私はしばらく解りかねて言葉を探した。

心臓麻痺だったという。四七才だったという。文盲の祖母がボンボンと補ってくれた。

家族は危機に瀕したときその力量を問われる。そのとき私は何ができるのか、そしてその家族を守るために最もつらい選択ができるのか、と。私は日出志の選択をその心根としての情緒を美しいと思った。

その晩、壁に陸上や野球で獲得してきたメダルや賞状が飾られた破れた障子の部屋で日出志と枕を並べた。帰ってからの職員会議でのその報告で、それまで職員たちが寄せてきた「山下ファンド」の拡充が確認された。日出志の心や決意を私たちのものとして彼とそれに続く三人の子どもたちの教育のために。そして、

今後も起こるであろう事態に備えた退所の子どもの後保護資金として。



1995年度も基準外職員確保のため
 パンジーを行います。
 不要品などのご協力を
 よろしくお願ひします。
 送り先:光の子どもの家 パンジー実行委員会各付

日誌抄 = 子どもと暮らしの風景 = 9. 1 ▶ 10. 15

- 9月1日 真っ黒な顔で一回り大きくなって始業式。
- 4日 加須市谷口康子氏より家具類を沢山。ありがとう。
- 11日 桐島美季（二才八カ月）入所。
- 15日 加須市近県剣道大会。中山幸太郎三位！ばんざい。
- 19日 小林晃子、希望していた衣料会社に就職内定。
- 20日 原道小学校大運動会。暑い日ざしのなかで全力で走り、美しく舞う。フレー、フレー！
- 23~24日 旗井の家の家族旅行を馬頭温泉にて。檜山真・淑子夫妻の熱い歓迎を受けて。那珂川の河原で檜山夫妻の父さんが釣ってこられた天然の鮎を焼いてバーベキュー。近くの運動公園でサッカーやランニングをして・・・夜は温泉に浸り、ゆっくりとくつろいで寝る。翌日、檜山夫妻の見送りを受けて小雨にけぶる中を益子焼を見学。夕刻ほっこりした思いを抱いて帰る。
- 24日 町内戸石幸夫氏より衣類をたくさん。ありがとう。
 ○高校生で不調続きの杜光夫、郡山市の菅野クリニックに受診。境界性人格障害と・・・。
- 25日 福島文明 鈴木自動車株式会社へ就職内定。
- 27日 この日から栗橋キリスト教会牧師池間豊先生学習指導のボランティアに週に三夜おいで下さる。感謝。
- 30日 大利根中学校体育祭。思春期まった中の魂たちが綱引きに歯を食いしばり、懸命に走り、そして跳ぶ。

- 精神的不調が続いた城山敬、座間市で一人暮らしの祖父の元へ家庭引き取り。何よりも家族の元がやすらぎをもたらしてくれる。血は水よりも濃い、を確認。
- 10月1日 原道地区体育祭。下山英哉、鈴木由紀子、岩崎まり子が出場して汗をかく。
- 2日 熱烈ご支援の梅沢三保氏よりお米をたくさん。感謝。
- 6日 鹿児島市の愛の聖母園、中川路京子理事長と施設長がはるばる施設見学に。来年あたり施設を建て替える予定で、熱心にご質問下さる。子どもたちが誇り、ゆったりとくつろげる園舎の完成を祈る。
- 7日 大利根藤幼稚園運動会。小さなランナーが真剣に走り、元気に歌い、ダンスにゆれた。
- 10日 古河市剣道大会 佐藤撰二位入賞。ワーイ！
- 11日 大利根町赤十字奉仕団と光の子どもの家後援会合同の草取りご奉仕を。きれいになりました。感謝。
- 13日 沖縄県土木建築部施設建築室宮城俊弘主幹他九名が県立養護施設改築のための施設見学に来訪。熱心にご質問を。子どもたちが安心して暮らせる家を！
- 14日 町内旗井の籠宮燃料よりゴミ焼却用に加工されたドラム缶二個を、民生委員を通じてご寄贈下さる。子どもたちとの暮らしの中で行き詰まった時など、ふと、皆さまのお励ましを思い、気を取り直す日々です。(智子)

/// // // // ———— 反 射 光 ———— // // // //

☆枯れ葉を集めた山に火をつけた煙が毎朝の風景になり今年も残り少なくなりました。☆義務教育の最後の年度に入った子どもたちは光の子どもの家で生活を延長できるかどうかの厳しい選別の時を間近にしています。☆今年是最多の四人が卒業で、それぞれ進路を迫られています。それぞれが勉強が好きで子どもではありません。しかし、高校へ行かないとこれからの生活が保障されるのに厳しさを増します。親権代行の責めが外され、糸の切れた奴隷よろしく彼らは社会という街頭に放り出されるからです。☆広岡智彦氏の急逝には打ちのめされました。それは自立援助ホーム、児童虐待防止センター、障害を持つ女性のための家など、まさしく制度化していない荒野の開拓者のような生涯で、大きな友人を失いました。☆広岡氏と同じ地平で苦闘している子どもたちも。☆人らしくあることに特段の苦痛と困難の伴うこの人の世だからこそこのクリスマスです。(哲)